

「仕える」ということ（大学チャペル・ウィーク奨励）

2006年5月25日 於：ガウチャー記念礼拝堂

皆さん、おはようございます。ただ今ご紹介いただきました松澤でございます。母校青山学院の理事長となってもう半年余りですが、チャペル・ウィークの奨励者として大学礼拝にお招きいただき、皆さんの前でお話できますことを、大変光栄に存じております。



私は、高等部から青山学院に学び、大学は経済学部を卒業して、日本火災海上保険株式会社に入社しました。主に営業部門の仕事をして海外勤務も経験しましたが、1998年に社長に就任し、会社の合併によって、現在の日本興亜損害保険株式会社の社長となりました。「日本興亜損保」という名前は、渡哲也さんや舘ひろしさんなどのテレビCMでご存知の方も多いかと存じます。

今日は、私の企業での経験をもとに、「企業の社会的責任」ということから、少しお話をさせていただきます。

「企業の社会的責任」、Corporate Social Responsibility、略して「CSR」と言いますが、皆さんはこの意味がお分かりでしょうか。最近では新聞・雑誌・テレビなどにもよく出てくる言葉ですので、聞いたことくらいはあると思いますし、授業で学んだり、就職のための勉強をしたりしていれば、相当深く理解されている方もいるかと思います。このCSRというのは、簡単に言えば、「企業が存在している価値は何か。存在している限り果たさなければならぬ責任とは何か。そして、それをいかに実践しているか」ということです。

「企業価値」という言葉を私たちはよく使います。「価値」と言うからには「お金」に換算できるものと考えがちですが、果たしてそれだけでしょうか。確かに、企業価値は「時価総額」や「当期利益」などの数字で表わされることが多いのですが、それだけではなく、「無形価値」というものがあり、それは非常に大きく、そして大切なものなのです。いちばん代表的で馴染みのあるのは「ブランド」です。その会社や商品の名前を聞いてイメージする「ブランド」は、正に「信用」そのものです。「信用」は、永年の企業の行動や商品品質の良さ、社員の対応などで築き上げられてくるもので、ある意味では、お金には代えられない、お金だけでは買うことができないものです。「信用」こそ、企業経

営の原点です。

また、企業が活動する中できちんと法令を守っているか、つまり、コンプライアンス、法令遵守の意識はどうか。お客様の満足度はどうか。株主の方々への還元や情報開示は適切か。会社と共に働く代理店さんや社員への対応は適切か。社会に役立つような活動を積極的に行なっているか。地球環境や地域社会に配慮した取り組みを行なっているか。など、これらの責任を果たしていることが、企業の存在条件であり、それがCSRというものなのです。売上や利益が企業の「姿」「形」であれば、CSRは企業の「人格」であり「心」なのです。

日本興亜損保では、今年度から3箇年の中期経営計画を策定しました。計画書の冒頭に、私は3つの言葉を置きました。「社会がより幸せになるために」「会社がより発展し続けるために」「社会の繁栄により貢献するために」というもので、これはまさしくCSRそのものです。また、私は、自分の信念として、「コンプライアンスの徹底」「お客様満足度の向上」「代理店満足度の向上」「従業員満足度の向上」を言い続けています。これらに終わりはありません。企業活動を行なっている限り、永遠に追い求めなければならぬ事柄であると考えています。

振り返ってみますと、20世紀後半の社会は、モノ中心の経済性・合理性追求といった物質的豊かさを追求する一方で、倫理観や道徳観といった人間性や精神性が薄れ、自己中心主義が蔓延して、信頼関係が希薄になる社会となっていたのではないかと思います。

「資本主義」「市場経済」という言葉がありますが、「資本」の「資」が「私」という字に変わってしまって、「私本位主義」という「私本主義」になってしまい、また、「市場経済」の「市場」が「私の情」という字になった「私情経済」になってしまっていたのではないかと考えます。

つまり、企業倫理を見失ってしまい、法にさえ触れなければ何をやってもいい、法の隙間を探し出して、潜り抜けて、とにかく利益を上げさえすればいい、株価が上がればいい、自分の会社さえ良ければいい、それが優秀な経営であり良い企業である、という考えが蔓延する時代であったと言えます。

しかし、企業社会はそれを反省し、例えば日本経団連が「企業行動憲章」を制定したりして、すべての企業や個人が高い倫理観のもと自由に創造性を発揮できる経済社会の構築に全力を挙げて取り組んできました。そうした中で、近年、企業の評価に際して「企業の社会的責任」への取り組みに注目されることが増えてきています。企業は、株主だ

けでなく、お客様、取引先、地域社会や社員といった様々なステークホルダーとの関わりの中で社会的責任を果たすことにより、社会における存在意義を高めていかなければならないのです。

企業はもちろん私的な存在です。一方、社会とつながって様々な恩恵を受けて成り立っています。ですから、企業とは、「私」のものであると同時に「公」のものであり、社会との関わりの中で生かされている存在なのです。ですから、様々なステークホルダーの期待にどう応えるか、社会にどういったものを還元するか、その真摯な姿勢が問われているのです。それぞれの企業の持つ文化や伝統、「信用」といった価値も、その中で継承され、企業は社会の構成員となっていきます。このように築き上げられた企業社会が、単に資本と市場の論理だけで動かされて良いはずがありません。

そもそも、企業やその従業員は、組織やその長に奉仕するのではなく、お客様とその先にある社会のために奉仕するものです。社会に「奉仕する」「仕える」という意識を持つことで、企業は公の器として社会の中で生かされているということが、はっきりと見えるようになります。CSRの前提となるのが、この「奉仕の精神」なのです。

私はクリスチャンであることを前面に押し出して企業経営をしている訳ではありませんが、企業経営における「倫理観」や「価値観」も、また、CSRを通して社会に「奉仕する」「仕える」という強い思いも、私の信仰に基づく信条から生まれたものです。しかし、決して、信仰を持って初めてそういう信条を持ったというのではなく、青山学院での学生生活を通して育まれてきたものなのだと感じています。高等部や大学では、積極的にキリスト教活動のグループに入ったわけでも、キリスト教の関連科目を熱心に勉強したわけでもありませんでした。しかし、折々に、青山学院の中に流れている「キリストの香り」に触れ、知らず知らずのうちに身につけていったように思えます。

「青山学院教育方針」には次のように謳われています。「青山学院の教育は キリスト教信仰に基づく教育をめざし、神の前に真実に生き 真理を謙虚に追求し 愛と奉仕の精神をもって すべての人と社会とに対する責任を 進んで果たす人間の形成を目的とする」。この中の「愛と奉仕の精神をもって」という言葉はもちろん大切なものですが、その前にある「神の前に真実に生き」という言葉もとても重要です。皆さんには、青山学院での学生生活を通して、単に学問的な知識を習得するだけでなく、確かな倫理観を身につけ、人に仕え、社会に仕える人間となってくださることを期待しています。

「サーバント・リーダーシップ」という言葉があります。サーバント、つまり「仕える者」としてのリーダーシップということですが、礼拝の始めにお読みいただいた聖書の

箇所「あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者のようになり、上に立つ人は、仕える者のようにになりなさい」というイエス様の言葉は、私にとって、まさに、「サーバント・リーダーシップの精神をもってCSR、企業の社会的責任に取り組みなさい」ということを示されている言葉だと思うのです。若い頃は何気なく読んでいたところだったのですが、私が管理職になった頃に、とても強く心に響いてきた箇所です。これが現在の私の働きの上での大切な指針の一つとなっています。

また、先ほど一緒に歌いました讃美歌 392 番の 3 節の歌詞に「神よ、み声を我ら聞けり。いずこへなりと送りたまえ。力は弱く知恵なけれど、御旨のままに用いたまえ」とありました。私がいま神様から与えられている働きの方は、「青山学院」と「日本興亜損保」です。「青山学院のために」「日本興亜損保のために」という私の小さな働きが、人のために、社会のために、さらにそれが神様のご用のために役立っていることを信じ、精一杯仕えていきたいと願っています。

最後に、これまで私が励ましを受けてきた聖書の言葉を、皆さんに贈りたいと思います。旧約聖書の「ヨシュア記」第 1 章 5 節から 9 節です。どうぞ聖書を開いて、一緒に声を出して読んでみましょう。聖書の前半部分、旧約聖書の 340 ページです。

ヨシュア記 第 1 章 5 節から 9 節。

「一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれてはならない。そうすれば、あなたがたはどこに行っても成功する。この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

神様はいつも私たちと共にいてくださいます。だから私たちはどんな時でも「強く、雄々しく」あることができるのです。

お祈りをいたします。

天にいらっしゃいます父なる神様。ただ今は、学生の皆さんを前にして、私の拙い経験から「仕える」ということについてお話をすることができましたことを感謝いたします。どうか青山学院に学ぶ学生諸君が、人に仕え、社会に仕え、そしてあなたに仕える働き

を充分になし、社会において「地の塩、世の光」となることができますように、神様、あなたが彼らを導き、育ててください。彼らがどんなにつらいことや困難なことに出会っても、いつもあなたが彼らの隣に座り、彼らと一緒に歩いてくださり、また、歩けなくなった時には彼らを背負い、あなたが恵みをもって彼らを生かし、愛してくださいますように。そして、彼ら一人ひとりに相応しい道を備えてくださいますように。

主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

